

しんぱん しどうようもんしゅう
新版 指導要文集

だいよんしょう ぶつぽう しゃかい
第四章 仏法と社会

おやこ こうよう
親子・孝養

げてんさんぜんよかん しよせん ふた

外典三千余卷の所詮に二つあり。いわゆる、孝と忠と

ちゆう

こう

いえ

出

こう

もう

こう

こう ちゆう

なり。忠もまた孝の家よりいでたり。孝と申すは高な

てんたか

こう

たか

こう

こう

り。天高けれども、孝よりも高からず。また孝とは厚な

ち 厚

こう

あつ

り。地あつけれども、孝よりは厚からず。

かいもくしやう

(005 開目抄

おやこ

こうよう

親子・孝養 58 ページー 10 行)

(外典の教えの根本は) はいわゆる孝行と忠義です。忠もまた孝の

なかから出てきたものです。孝というのは高ということであり、天は

高いものですが孝よりは高くないのです。また孝とは厚ということ

あり、大地は厚いものですが孝よりは厚くないのです。

父母ふぼの成仏じょうぶつは、すなわ即ち子この成仏じょうぶつなり。こ子の成仏じょうぶつは、すなわ即ち父母ふぼの成仏じょうぶつなり。

（
096
御講聞書
おんこうききがき

親子おやこ・孝養こうよう
1130
ページー8行

親子

おやこのわかれこそ、月日のへだつるままに、いよいよ

歎 深

なげきふかかりぬべくみえ候え。

見 そちら

こうにちぼうごしよ

108 光日房御書

おやこ こうよう

親子・孝養

1252 ページ 12 行

ひと 親 あくにん

人のおやは悪人なれども、子善人なれば、おやの罪ゆるす

こぜんにん

つみ 許

こあくにん

おやぜんにん

こ つみ

ことあり。また子悪人なれども、親善人なれば、子の罪ゆ

こやしろうどの

あくにん

るさるることあり。されば、故弥四郎殿はたとい悪人なり

生

はは

しゃかぶつ

ごほうぜん

ちゅうや

歎

弔

とも、うめる母、釈迦仏の御宝前にして昼夜なげきとぶら

か ひと浮

況

わば、いかでか彼の人うかばざるべき。いかにいおうや、

か ひと

ほけきよう

しん

親

導

み

彼の人は法華経を信じたりしかば、おやをみちびく身とぞ

そろう

なられて候らん。

こうにちぼうごしよ

(108 光日房御書

おやこ

こうよう

親子・孝養

1254

ページー15行)

ひと おや あくにん

こ ぜんにん

おや つみ ゆる

人の親は悪人であつても子が善人であれば、親の罪が許される

こ あくにん

おや ぜんにん

こ

こともあります。また子が悪人であつても親が善人であれば、子の

つみ ゆる

こやしろうどの

罪が許されることもあるのです。ですから、故弥四郎殿はたとえ

あくにん

う

はは

しゃかぶつ

ごほんぞん

ごほうぜん

ちゅうや

悪人であつても、生みの母が釈迦仏（御本尊）の御宝前で昼夜にな

ついでんくよう

やしろうどの

じょうぶつ

げき、追善供養すれば、どうして弥四郎殿が成仏できないことがあ

やしろうどの

せいぜん

ほけきよう

ごほんぞん

しん

りましようか。ましてや弥四郎殿は生前は法華経（御本尊）と信じ

くる

きようがい

おや

じょうぶつ

ていたのですから、苦しみの境界へおちるどころか、親を成仏へ

みちび み

導く身となられていることでしょう。

まつさか

かしわよろこ

しば 枯

らん 泣

こころな

そうもく

松栄うれば柏悦ぶ。芝かるれば蘭なく。情無き草木す

とも

よろこ

とも

なげ

ひと

おや

ら、友の喜び友の歎き一つなり。いかにいわんや、親と

こ

ちぎ

たいない

やど

ここのつき

へ

う

お

すうねん

子との契り、胎内に宿して九月を経て生み落とし、数年

やしな

まで養いき。

（111 光日上人御返事

こうにちしょうにんごへんじ

おやこ

こうよう

親子・孝養

1267

ページー9 行

こ おも きんちよう ひ なか い こ おも ひんによ
子を思う金鳥は火の中に入りనికి。子を思いし貧女は
ごうが しず か きんちよう いま みろくぼさつ か かわ
恒河に沈みき。彼の金鳥は今の弥勒菩薩なり。彼の河に
しず によん だいぼんてんのう う たま
沈みし女人は大梵天王と生まれ給えり。いかにいわんや、
いま こうにちしようにん こ おも ほけきよう ぎようじや な たも
今の光日上人は子を思うあまりに法華經の行者と成り給
はは こ りようぜんじようど まい たも
う。母と子と、ともに靈山淨土へ参り給うべし。

(111 光日上人御返事

おやこ こうよう
親子・孝養
1267 ページ 12 行)

かかる不思議の日蓮をうみ出だせし父母は、ふしぎ にちれん い ふぼ にほんこく いっさい
衆生の中には大果報の人なり。しゆじよう なか だいかほう ひと ふぼ こ父母となり、その子とな
るも、必ず宿習なり。かなら しゆくじゆう にちれん ほけきよう しやかによらいもし日蓮が法華経・釈迦如来の
御使いならば、おんつか ふぼ ゆえ父母、あにその故なからんや。

（
113 寂日房御書
じやくにちぼうごしよ

親子・孝養
おやこ こうよう
1269 ページ 4 行

しやくそん こうよう ひと せそん 名 たま きへん せそん
釈尊は孝養の人を世尊となづけ給えり。 貴辺あに世尊に
あらずや。

167 曾谷殿御返事 (輪陀王の事)
そやどのごへんじ りんだおう こと

親子・孝養
おやこ こうよう
1447 ページ 9 行

いっさい

したが

そうら

ほとけ

成

みち

一切はおやに随うべきにてこそ候えども、

仏になる道

したが

こうよう

もと

そうろう

は随わぬが孝養の本にて候か。

きようだいしろう

(171 兄弟抄

おやこ

こうよう

親子・孝養

1476

ページー7行)

ほけきよう

敵

おや

したが

いちじよう

ぎようじゃ

あに

法華經のかたきになる親に随つて、一乗の行者なる兄

捨

おや

こうよう

詮

をすてば、親の孝養となりなんや。せんずるところ、

一

筋

思

き

あに

おな

ぶつどう

成

たま

ひとすじにおもい切つて、兄と同じく仏道をなり給え。

しんぷ

みようしようごんのう

きようだい

じようぞう

じようげん

親父は妙莊嚴王のごとし、兄弟は淨蔵・浄眼なるべ

むかし

いま

ほけきよう

理

違

し。昔と今はかわるとも、法華經のことわりたがうべか

らず。

(176 兵衛志殿御返事 (三障四魔の事))

ひようえのさかんどのごへんじ

さんしようしま

こと

おやこ

こうよう

親子・孝養

1487

ページー10行)

されば、父母はもうけやすし、法華経はあいがたし。今度

ふぼ

背

ほけきよう

あいやすき父母のことばをそむきて、あいがたき法華経の

友 離

わ み ほとけ 成

背

ともにはなれずば、我が身、仏になるのみならず、そむ

親 導

きしおやをもみちびきなん。

ひようえのさかんどのごへんじ さんしょうしま こと

176 兵衛志殿御返事（三障四魔の事）

おやこ こうよう

親子・孝養 1489 ページ 10 行

しんぷ

たびたび

ご

勘

当

被

たま

親父より度々の御かんどうをこうぼらせ給いしかども、

きようだい

じようぞう

じようげん

ごしん

やくおう

やくじよう

兄弟ともに浄蔵・浄眼の後身か、はたまた薬王・薬上

おんはか

こと 故

しんぷ

ご 勘

気

の御計らいかのゆえに、ついに事ゆえなく親父の御かんき

許

たま

さき

た

ごこうよう

こころ

をゆりさせ給いて、前に立てまいらせし御孝養、心に

任

たま

こうし

さだ

てん

まかせさせ給いぬるは、あに孝子にあらずや。定めて天よ

よろこ

ほけきよう

じゅうらせつ

ごのうじゆ

りも悦びをあたえ、法華経・十羅刹も御納受あるべし。

こうしごしよ

(181 孝子御書

おやこ

こうよう

親子・孝養

1499

ページー10行)

ただし、法華經と申す經は、ほけきよう もう きよう てんしびよう もう やまい 転子病と申す病のよう
にそうろう てんし もう おや こ すく そうら
候。転子と申すは、親のようなる子は少なく候えど
も、この病は必ず伝わり候なり。やまい かなら つた そうろう

(247 弥源太入道殿御返事

やげんたにゆうどうどのこへんじ

おやこ こうよう 親子・孝養
1700 ページ 14 行

こ たから もう きょうもん

子は財と申す経文もはんべり。所以は経文に云わく

むすこ ふく ついしゆ

「その男、福を追修するをもつて、大光明有つて地獄を

て

ふぼ

しんじん

おこ

とううんぬん

照らし、その父母をして信心を發さしむ」等云々。

せんいちあまごへんじ

(268 千日尼御返事

おやこ

こうよう

親子・孝養

1751

ページー13行)

こ

きょうもん

しんちかんぎよう

子はたからであるという経文もあります。心地観経には「その

だんじよ

お

ふく

しゅう

だいこうみよう

じごく

て

男女が追つて福を修すれば、大光明があて地獄を照らし、その

ふぼ しんじん

の

父母に信心をおこさせる」と述べています。

親おやによき物ものを与えんと思つて、せめてすることなくば、
いちにちいににさんど笑おも
一日に二・三度えみて向かえとなり。

305 上野殿御消息うえのどのごしやうそく（四徳四恩の事しとくしおん こと）

親子・孝養おやこ こうよう
1850 ページ 10 行

いち ふぼ おん ほう ふぼ しやくびやくにたい わごう

一に父母の恩を報ぜよとは、父母の赤白二涕、和合して

わ み はは たいない やど にひやくしちじゅうにち このつき

我が身となる。母の胎内に宿ること二百七十日、九月の

あいだ さんじゅうしち し くる う お

間、三十七度、死ぬるほどの苦しみあり。生み落とす

とき 堪 おも ねん いき いただき い けむり

時、たえがたしと思ひ念ずる息、頂より出ずる煙、

ぼんてん いた う お ちち 飲

梵天に至る。さて生み落とされて乳をのむこと

いっぴやくはちじゅうよく さんねん あいだ ふぼ ひざ あそ ひと

一百八十余石、三年が間は父母の膝に遊び、人となりて

ぶつきよう しん ちち はは おん ほう ちち

仏教を信ずれば、まずこの父と母との恩を報ずべし。父

おん たか しゅみせん 低 はは おん ふか

の恩の-highきこと、須弥山なおひきし。母の恩の深きこと、

たいかい かい あさ あいかま ふぼ おん ほう

大海還つて浅し。相構えて父母の恩を報ずべし。

うえのどのごしようそく しとくしおん こと
305 上野殿御消息 (四徳四恩の事)

おやこ こうよう

親子・孝養 1851 ページ 5 行)

いち ふぼ おん

はは ち しゃく ちち

一に父母の恩にむくいなさいというのは、母の血(赤)と、父の

せい びやく にたい けつごう にんげん

う はは ち はは こ

精(白)の二滯が結合して人間として生まれるのです。母は子を

たいない やど にひやくななじゅうにち きゆう げつ あいだ さんじゅうなかない し

胎内に宿して二百七十日、九か月の間に三十七回も死ぬほ

くる う とき くる

どの苦しみがあります。生みおとす時の苦しみはがまんできないほど

くる いき くび で けむり ぼんてん

であり、苦しみをたえる息、首すじから出る煙は梵天にまでとど

う の ちち りよう ひやくはちじゅうよこく

くほどです。また、生まれてから飲む乳の量は百八十余石、

さんねんかん ふぼ ひざ あそ はぐく おとな ぶつきよう しん

三年間は父母の膝で遊び育まれ、大人になって仏教を信ずるこ

ちち はは おん むく

とができたのですから、まずこの父と母との恩に報いるべきなので

ちち おん たか

しゅみせん

ひく

はは おん ふか

す。父の恩を高さにとえれば須弥山でさえまだ低く、母の恩を深

たいかい

あさ

こころ

ふぼ

さにたとえれば大海でさえもまだ浅いものなのです。心して父母の

おん むく

恩に報いていきなさい。

ときみつ むぎ なん へん ほけきよう もんじ

この時光が表、何ぞ変じて法華經の文字とならざらん。こ

ほけきよう もんじ しゃかぶつ たま ときみつ こしんぷ そう

の法華經の文字は釈迦仏となり給い、時光が故親父の左右

おんはね りようぜんじようど 飛 たま 翔 たま

の御羽となりて、靈山浄土へとび給え、かけり給え、

帰 ときみつ み 覆 育 たま

かえりて時光が身をおおい、はぐくみ給え。

ときみつごへんじ

319 時光御返事

おやこ こうよう

親子・孝養

1881

ページー4行

きへん にほんこくだいいち

こうよう

ひと

ぼんてん

たいしやくく 降

くだ

貴辺は日本国第一の孝養の人なり。

梵天・帝釈おり下つ

そう

はね

しほう

ちじん

あし

戴

ふぼ

て左右の羽となり、四方の地神は足をいただいて父母と

仰
たも

あおぎ給うらん。

うえのどのごへんじ

こうふこう

こと

329 上野殿御返事（孝不孝の事）

おやこ

こうよう

親子・孝養

1900

ページー1行

おなご もん 開
女子は門をひらく、男子は家をつぐ。日本国を知っても、
こ たれ 繼
子なくば誰にかつがすべき。財を大千にみてても、子な
くば誰にかゆずるべき。 たれ 讓

331 上野殿御返事（日若御前誕生の事）
うえのどのごへんじ ひわかごぜんたんじょう こと

親子・孝養
おやこ こうよう
1902 ページ 6 行

こ たら もう きようもん
子は財と申す経文あり。 妙莊嚴王は、 一期の後、 無間

だいじよう もう じごく お たも じようぞう もう

大城と申す地獄へ堕ちさせ給うべかりしが、 浄蔵と申せ

たいし 救 だいじごく く 免 たも

し太子にすくわれて、 大地獄の苦をまぬかれさせ給うのみ

しやらじゅおうぶつ もう ほとけ 成 たも しようだいに よ もう

ならず、 娑羅樹王仏と申す仏とならせ給う。 青提女と申

によにん けんどん 咎 がきどう お そうら

せし女人は、 慳貪のとがによつて餓鬼道に堕ちて候いし

もくれん もう こ 助 がきどう い そうら

が、 目連と申す子にたすけられて、 餓鬼道を出で候い

こ たら もう きようもん 違

ぬ。 されば、 子を財と申す経文たがうことなし。

うえののあまごぜんごへんじ りようぜんさいかい こと

338 上野尼御前御返事 (霊山再会の事)

おやこ こうよう

親子・孝養 1920 ページ 15 行

こ たから

きょうもん

みょうしょうごんのう げてん しん

子は宝であるという経文があります。妙莊嚴王は外典を信

しごむげんじごく お

じょうぞう

じていたため、死後無間地獄に堕ちるはずでしたが、浄蔵という

こども みちび

ぶつぽう

きえ

すく

じごく

くる

まぬか

子供の導きで仏法に帰依して救われ、地獄の苦しみを免れること

しやらじゅおうぶつ

ほとけ

ができただけでなく、さらに娑羅樹王仏という仏になられたので

しょうだいによ

じよせい

よくふか

ものお

とが

しご

す。また青提女という女性は欲深く物惜しみする科によつて死後

がきどう

こ

もくれんそんじゃ

たす

がきどう

で

餓鬼道におちましたが、子の目連尊者に助けられて餓鬼道から出る

こ たから

きょうもん

ただ

ことができました。したがって、子は宝という経文は正しいので

す。

みようしようごんのう

もう

おう

あくおう

おんたいし

妙莊嚴王と申せし王は、悪王なりしかども、御太子、

じようぞう

じようげん

みちび

たま

ふぼふたりとも

ほけきよう

浄蔵・浄眼の導かせ給いしかば、父母二人共に法華経

ごしんようあ

ほとけ

成

たま

を御信用有つて、仏にならせ給いしぞかし。

じようぞうじようげんごしんようそく

383 浄蔵浄眼御消息

おやこ

こうよう

親子・孝養

2008

ページー17行